

序

幼い子供を初めて育てる親には、日々新鮮な驚きがある。「これは何」「それはどうして」という素朴な子供の問いの答えに窮し、その鋭い観察力にいい質問だと感じ入ったりする類である。子供には大人の気の付かない視点や解釈があって、わが子は天才ではないかと勘違いする親馬鹿もいる。大人にとっては当たり前のこととして考えもしなかったことが、実はその意味を十分説明できないものであったことを改めて子供から教えられ驚かされるのである。ここで大人はややもすると親の権威を維持するために理不尽な説明で子を納得させようとしたりすることがあるがこれは本末転倒であろう。子供の極く幼い頃は、大人のいい加減な説明で一応その場は凌げるが、やがて子供騙しの説明では子の納得が得られないようになってくる。そして絶対であった親に対する不信感が子の心に次第に芽生えてくるようになる。精神的な親離れの始まりであり、子の自立、自意識育成のモチベーションともなる。このとき、子供の好奇心とそれを満足させるには自ら何をなすべきかを指導することこそ、親のなし得る唯一の役割であり、そこにまた新しい親子の信頼関係が生まれてくる。

つまり望ましい親子関係とは、相互に信頼しながら、しかも子供は親を否定することによって diachronic な家族の成長が維持される状況と言えよう。こうした親子関係のアナロジーは社会秩序のありようにも当てはまる。歴史的にみても、それまでの説明で十分と思われていた社会通念に満足できなくなった時に、新しい説明が求められ革新が起こっている。信頼関係の崩れた場合には流血を伴うが、過去の権威を否定する社会革命や、新しい学説に基づく科学革命などがその例である。現状の体制に疑問もなく当然のものとして受け入れられる状態は確かに平和で安穏な社会かも知れない。それは理想的には浄土の世界ではあるが、逆説的に言えば静止した社会であり、未知への探索も新しい驚きもない世界である。

研究者の育成にもこの親子関係がそのまま当てはまる。研究とは元来、素朴な疑問を持ちつづけることによって成り立つものであり、後進の素朴な疑問は問題の所在を先達に教えてくれる。既知に対する疑問の提起は、それがあくまでも現象に対する謙虚な姿勢によるものである限り、先達の否定ではあっても不信感とは異質なものである。

1993年10月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士 太田利彦